

## 「しめじ」の語源について

三浦 励一（龍谷大学農学部）

「しめじ」の語源は何か。インターネットで検索してみると「湿った地に生えるから」、「土地を占めるほどびっしりと生えるから」の2説が紹介されていることが多いが、これで釈然としないのは私だけではあるまい。ホンシメジにしろ、おおざっぱに「しめじ」と呼ばれそうな他の食用菌にしろ、山の中で特に湿った場所を選んで生えるわけではないし、地面を埋め尽くすように生えるわけでもない。この「しめじ」の語源について自分なりに考えてみたことがあるので、ここに紹介してみたい。

まず基本的な文献を押さえておくことにする。『きのこの語源・方言事典』には、(1) 鎌倉時代の書物に夏の異称として「しめじ」があることから「夏頃に発生するきのこの意、(2) 湿った地に発生するから、(3) 地を占めるほどに発生するから、の3説が紹介されている。また『日本国語大辞典』には、(1) シメイツ（沾出・湿出）が変化した、(2) ソヒ、ムレ、タケの反シメテの転、(3) シジムレイデタケ（繁群出茸）の意、(4) 茅（チガヤ）の多く生えた地にあるところから、シメヂタケ（標茅茸）の意、の4説が紹介されている。いずれの資料も、編者の所説を述べたわけではなく、既存の説を集めて収録したものであることに留意されたい。

話が脇道にそれてしまうが、後者の(2)については補足が必要かもしれない。「ソヒ」という語は最初の音（子音）と最後の音（母

音）を残して「シ」と短縮される可能性があり、同様に「ムレ」は「メ」に、「タケ」は「テ」に変化する可能性がある（このような音韻変形の法則を「反」という）。そこで「添ひ群れ茸」という古語があったとすると、これが「シメテ」とつづまり、さらに「シメジ」になったというのである。これはもともと鎌倉時代の『名語記』という書物に書かれていたシメジの語源説であるが、この書物全体がこじつけの言葉遊びのような本であるから、古いというだけで信用するわけにはいかない。その他、どの語源説をみても、「なるほど」と納得できるものはないように思う。

山歩きの途中、木々の茂みを透かしてきのこの姿が飛び込んでくる一瞬があるように、「しめじ」の意味が見えた感じがしたのは、たまたま通勤電車の中で文庫本の『折口信夫全集』を読んでいたときであった。それは「古代人の思考の基礎」と題した論考の一節である。

『万葉集』巻三に、「ちはやぶる神の社しなかりせば春日の野辺に粟蒔かましを」という歌がある。「恐ろしい神の社さえなかったら、あの野辺にアワの種を蒔くのですが」というのが表面上の意味である。裏の意味がなかなかおもしろいのだが、いまは関係ないので、興味のある方はその方面の解説書をご覧ください。さて折口は、この「神の社」は今みるような木造の神社をさすのではないという。

「昔は所有地を示すのには、縄張りをして、

野を標(シ)めた。其処には、他人が這入る事も、作物を作る事も出来なかつた。神のやしろといふのも、神殿が出来てゐるのではなく、空地になつてゐながら、祭りの時に、神の降りる所として、標の縄を張つて、定めてある所を言ふ。」

この「しめる」(古語「しむ」)という言葉は、現在の「占める」とはニュアンスが違うので、折口はわざと「標めた」と書いている。

『日本国語大辞典』によれば、「しめる」の古い意味は「標(しめ)を張つて自分の占有であることを示し、他人の立入りをとめる」こと、そして「標」とは「神の居る地域、また、特定の人間の領有する土地であるため、立入りを禁ずることを示すしるし」であつた。「標」にはいろいろな形があるが、その代表は縄で周囲を囲うもので、それが「縄張り」の語源である。

『万葉集』には、この「標」という言葉がけっこうよく出てくる。有名な「あかねさす紫野行き標野行き野守は見ずや君が袖振る」の「標野」(しめの)は、一般人立ち入り禁止となつてゐる野原のことである。「明日よりは春菜摘まむと標めし野に昨日も今日も雪は降りつつ」という歌では、春の若菜がそろそろ摘み頃になつた野原の一角を縄で囲むなどして、「他人は入るなよ」と意思表示しているのである。

そのような「シメ」の最たるものが、神域を標めるシメナワであつた。神社の軒下や神棚の前に横に張られたしめ縄は象徴化が進んだものである。『日本国語大辞典』の「しめなわ」の説明には、「神前や神事の場にめぐらして、神聖な場所と不浄な外界とを区別するのに用いる」とある。本来のしめ縄は神域をぐるりと囲んで設けられる「結界」であつた。地鎮祭のしめ縄はミニチュアではあるがその様式を伝えている。

映画にもなつた夢枕獏の小説『陰陽師』には、古代における多様な結界の形が表現され

ている。結界は中にある何かを守つてゐる場合もあるし、悪霊の威力を中に封じ込めてゐる場合もある。ある区域を縄で囲めばもちろん結界であるが、いくつかのものを円周上に配置して「呪」をかければ、それでも結界になる。そういう精神世界に住んでゐた人々は、野山で何かが円を描くように配置されていれば、何者かの意志を感じて踏みとどまつたはずだ。ましてやそれがキノコだったら？ その結界を張つたのは、人ではないことになる。

こうして「しめる」という言葉の古代的イメージをたどつてくると、もうお気づきであろう。「しめじ」とはもともと「標地」、つまり菌輪をつくつて生えるきのこのことではなかつただろうか。菌輪を英語ではフェアリーリング(妖精の輪)というが、日本でだって菌輪は、神か妖物か、とにかく人ならぬものの存在を示すと考えられていたにきまつてゐる。これほど目立つた自然現象をさす日本語が、「菌輪」という学術用語以前に何もなかつたはずはない。それこそが「しめじ」だつたのではないか。

ついでに細かいことをいえば、「しめじ」の「じ」は、「地」ではなく、キノコをさす古い言葉だつた可能性も考えられる。ケロウジ、マツオウジのように、意味がはっきりしない「ジ」がつくキノコがほかにもあるからである。これに仮に「茸」の字をあてるなら、しめじは「標茸」でもよいかもかもしれない。

(本稿は、はじめ『近畿植物同好会会報』第117号(2013年9月発行)に発表した拙論「植物和名の語源再考(2)シメジ」をもとに書き改めたものです。)

## 参考文献

伊藤博訳注『新版万葉集』(2009年、角川ソフィア文庫版)。

岡田希雄「鎌倉期の語原辞書名語記十帖に就いて(中):名語記の語原解釋の考察」、『國

語・國文』5: 195-224、1935年。

奥沢康正・奥沢正紀『きのこの語源・方言事典』1998年、山と溪谷社。

折口信夫『古代研究・民俗学篇第二冊』(1930年、大岡山書店；1975年、中公文庫『折口

信夫全集第三巻』)。

日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部『日本国語大辞典第二版』、2000-2002年、小学館。オンライン(ジャパンナレッジプラス)版。



## [図書紹介]

### ■きのこレターブック 100 Writing and Crafting Papers Of Mushroom

出版社：パイインターナショナル、2017年9月19日、208頁、ISBN：978-4-7562-4953-1、1680円＋税

昨年開催された千葉県立中央博物館の「きのこワンダーランド」展で展示されていた、内外の18世紀から20世紀にかけての図譜をご覧になったでしょうか。日本の本草図譜の独創的な味わい、イタリア、フランス、ドイツなど、表情豊かに描かれたきのこたちは美しいだけでなく、手法、構図の巧みさをあわせもち、生物書というよりは美術書のような魅力にあふれていた。同展2期のポスターともなった、モンリュソン地方の大型菌類図譜を含めた、これら千葉県立中央博物館所蔵の図譜を中心に、世界で最初に発行されたルーマニアのきのこ切手を加え、100枚の便箋紙仕立ての印刷物となった、ブックというよりは雑貨といったほうがよい一冊。切り離して手紙として使うもよし、額装してもよし、加工するもよし。まるごとプレゼントしてもよし。きのこ好きでなくともほしくなる1冊。いや、2冊。(公)



### ■日本人ときのコ (ヤマケイ新書)

著者：岡村稔久、出版社：山と溪谷社、2017年10月5日、260頁、ISBN：978-4-635-51046-2、900円＋税

帯に「なぜ人は、こんなにもきのこに魅了されるのか？奈良時代から江戸時代まで、昔の説話や日記から読み解く、楽しくおかしい日本人ときこの歴史。」とあるように、『まつたけの文化誌』の著者が、おもだった古典のなかから、きのこの登場する部分を抜粋、きのこにまつわる豊富な資料に解説を加えた、わかりやすく勉強になる一冊。日本人ならぜひ知っておきたい、なかなかなかったきのこだけの文化史です。(公)

